

# 大伴旅人

仙台市

広幡 文

日本書紀「壬申の乱」に参加した大伴安麻呂を父とし、万葉集の編者と目される大伴家持を子とする大伴旅人は、万葉集に大宰帥として登場する。しかも万葉集に掲載される歌はことのほか多い。が、歌の期間は神龜三年(七二六年)から天平三年(七三一年)までの六年間と短い。「令和」元号に関連し、しかも讃酒歌などで名をはせる大伴旅人の歌人としての人生がこんなにも短いのが不思議でならない。それだけ謎の多い人物。同時に一癖も二癖もある山上憶良がこの大伴旅人を慕ってやまない姿が万葉集に記される。天才が天才をこよなく愛した姿。このように興味の尽きない大伴旅人の歌をじっくりと眺めてみる。

## 老境の身で鮮烈なデビュー

暮春之月幸芳野離宮時中納言大伴卿奉勅作歌 未逕奉上歌(卷三・三一五〜六)

見吉野之芳野乃宮者 山可良志貴く有師 水可良思 清きやけく有師 天地与 長く久しく萬代よろづよ 尔 改(か)はらず有らむ 行幸(いでま)し之宮

## 反歌

昔見之象(きさ)乃小河乎今見れ者 弥よ清(さ)やけく 成りに来る鴨 中納言大伴卿と言え ば「中納言家持」であるが、この歌の作者はどんな学者も大伴旅人と比定する。理由は直前に藤原宇合の「被使改造難波堵(と)土の垣根歌」(神龜三年〓七二六年)があるからだ。

吉野を詠んだ歌だが、吉野の「象山」は神龜二年に山部赤人も詠んでいる。旅人の歌に感情はこもっていないが、すぐれた技巧をさらりと披露するすばらしい作で、老境の身でのデビュー作がこれほどだ

から、若かりし頃の歌があれば、万葉集はまた違った歌集になっていただろう。なおこの芳野離宮歌は思い出を詠んだ歌。それが証拠に「象(きさ)乃小河」を昔見たと反歌で詠んでいる。この時大伴旅人は自宅のある奈良にいる。吉野離宮に幸したのは「春の月」である。大伴旅人の吉野初見は養老四年(七二〇年)隼人征伐の時と考えられる。

帥大伴卿遥思芳野離宮作歌一首(卷六・九六〇)

隼人乃 瀬戸乃磐母も 年魚走る 芳野之瀧尔 尚不及家里

帥大伴卿五首(卷三・三三二〜五)

吾盛り復變(を)ちめ八方殆(ほとほと)に寧樂の京乎見ずか成りなむ

吾命毛 常に有ら奴可 昔見之 象(きさ)の小河乎 行きて見む為

浅茅原 曲(つばら)曲二 物念者 故にし郷之 念ほゆる可聞

萱(わすれ)草 吾紐二付く 香具山乃 故去之里乎 忘れむ之為

吾行く者久に者有らじ 夢乃和太 湍に者成らず而 淵にし有ら毛

大伴旅人は、帥大伴卿となつて大宰府に赴任する。神龜五年(七二八年)大宰帥として妻大伴郎女を伴つて赴任したとされる。もう老境の身なのに、奈良から大宰府に赴任させられるとわが身の不幸を嘆き、それもこれも「吉野の象の小川」を見たいため(注1)だと、自分なりの理由をひけらかす。旅の途中に、浅茅原・萱草・香具山がある。そして大宰府の地は「夢の和太」、海辺にあると紹介する。しかも大宰府への旅は「久には有らじ」と、これが最初ではなくかつそう遠い昔でもないと訴える(注2)。これが養老四年吉野初見の根拠である。

【注1】神龜三年頃に象乃小河(吉野)を詠んだ大伴旅人は、大宰府赴任時(神龜五年)象乃小河(吉野)を見るため大宰府に赴任すると歌う。吉野と大宰府は近い。倭には鳴きて歎来らむ 呼子鳥 象の中山呼ぶそ越えなる(七〇) 高市黒人

昔見之 象(きさ)の小河乎今見れば 弥(い)や清く 成りにけるかも(三二六)

吾命毛 常に有ら奴可 昔見之 象の小河乎 行きて見む為(三三二)

三吉野の 象山際乃 木末には こゝだもさわぐ 鳥の声かも(九二四) 山部赤人

【注2】夢の和太Ⅱこの場で「瀬には成らずて淵にし有るらも」と詠まれるが、後に(九六九)「淵は浅にて瀬にか成るらむ」と逆転させる。しかも「しましくも去きて見て壯鹿神名火乃」と上の句にあるから「近江志賀」を連想させる。巻七・芳野作一連歌に「夢の和太」が登場するので、「夢の和太」は間違いなく吉野の地名か吉野に近い地名である。

芳野作

神左振る 磐根己凝敷き 三芳野の 水分山を 見れば悲しも(一一三〇)  
皆人の恋ふる三芳野 今日見れば うべも恋ひ来る 山川清み(一一三一)  
夢の和太事にし在り来り寝(うつ)にも見て来る物を念ひし念へば(一一三二)  
皇祖神の 神の宮人 ところづら 弥常敷くに 吾反り見む(一一三三)

## 飾らぬ人生を誇りとする旅人

大宰帥大伴卿讃酒歌十三首(三三八〜三五〇)

験(しるし)無き物乎念はず者 一坏の濁れる酒乎飲む可く有る良師  
酒の名乎 聖跡負はせ師 古昔の 大き聖之 言乃宣し左  
古へ之 七の賢しき 人等毛 欲り為し物者 酒西有る良師  
言はむ為便 為む便知らず 極まりて 貴き物者 酒西有る良之  
中々尔 人跡有らず者 酒壺二 成りに而師鴨 酒二染み嘗(な)む  
痛(あな)醜(にく)し 賢(さか)し良乎為跡 酒飲まぬ 人乎熟(よく)く  
見者 猿二鴨似む

あたひ無き寶跡言ふ十万一坏(つき)乃濁れる酒尔豈(あに)益目八方  
夜光る玉跡言ふ十万 酒飲み而 情(こころ)平遣る尔豈若か目八方  
よのなか之遊びの道尔たのしき者酔ひ泣き為る尔有る可く有る良師  
このよ尔之楽しく有ら者こむよに者蟲(むし)尔鳥尔毛吾羽成り奈武  
生ける者遂に毛死ぬる物尔有る者このよ在る間はたのし乎あらな  
もだ居りてさかしら為る者 酒飲み而酔ひ泣き為る尔尚如かず来り

験(しるし)形にならない物思いをしない人(感傷にひたらず現実をしつかり受け止める人)は、酒をこよなく愛する人である、という歌で始まる讃酒歌は、中国の竹林七賢人も酒を欲したと紹介し、人であるより酒壺になってしまいたいと歌い上げ、利口ぶって沈黙するより酔い泣きするのが一番だと居直っている。これほどに、酒好きな姿を率直に歌いこんだ人物はいないだろう。

本当に酒が好きでなければ作れないと思わせる、文学的な趣向をしつかり満たした作品と思う。柿本人麻呂時代(朝廷歌人)とは異なる、個(私)を大事にする文学世界の登場である。

しかしその裏に、大宰府に流されたという思いが根強くある。

しかもこれほどの筆力があるなら、武士として生きるより、和歌の世界に生きるほうが心を満たせるはず。ただし山上憶良のように、社会の底辺を見つめる鋭い視点は旅人にはない。あくまで自分事(自分の力の及ぶ範囲)にとらえて歌にするのが、武家の棟梁旅人の文学である。なお旅人の讃酒歌の直前に、山上憶良の歌が掲載される。

憶良ら者今者罷らむ子哭くらむ其彼の母毛吾を待つらむ曾(三三七)

大宰府での旅人の宴席にたびたび呼ばれる憶良は、このように子や妻のせいにして早々に退席していたようだ。旅人と憶良の文学のありようを強調する、万葉集編者の演出である。

## 人生の友、山上憶良

神亀五年戊辰大宰帥大伴卿思戀故人歌(卷三・四三八〜四〇)

うつくしき人之纏きて而しきたへ之 吾が手枕乎 纏く人有らめ哉  
還へるべく時者成り来り 京師尔而誰手本乎可 吾が枕(まくら)かむ  
京在(な)る荒れ有る家尔 一り寝者 旅に益さり而 苦し辛る可し

夫人を伴って大宰府にやってきた旅人であるが、赴任直後夫人が逝去する。「奈良の自宅に帰った時、共に寝る人はいない。出張先の大

宰府ならまだ我慢できるが、奈良の自宅で一人寝ることはどれほどさびしいことか」と、静かなおもちで嘆き悲しんでいる。

大宰帥大伴卿報凶問歌一首（巻五・七九三）

禍故重畳 凶問累集 永懷崩心之悲 獨流斷腸之泣 但依兩君 大助傾命纔

（わずか継耳 筆不盡言 古今所歎 神龜五年（七二八）六月二十三日

余の中波むなしき物等 知る時し いよ麻須万須 悲しかりけり

今度は山上憶良が、大伴旅人にかわって思いつき悲しんでいる。しかもいつものように飾らぬ言葉で表現している。

さらに山上憶良が慟哭の歌を続ける。

日本挽歌（巻五・七九四〜九）

大王の 遠朝廷等 斯良農比の 筑紫の国尔 泣く子成す 慕ひ来まして 伊企陁（ち）尔母 未だ休めず 年月母 未だ有らねば 情ゆも 念はぬ間（かひ）尔 打ち靡き 許夜（今宵）斯（か）く濡れ 言はむ便（すべ） 為む便（すべ）知ら尔 石木を母 とひさけ知らず 家成らば 形は有らむを 恨めしき 妹の命（みこと）の 有れをばも 如何にせよとか には鳥カイツブリの 二人並びぬ 語らひし 情そむきて 家離ります

家にゆきて 如何にか吾せむ 枕付く孀や寂しく 念ほゆべしも 愛（は）しき吉 如是耳からに慕ひ来し 妹之情乃 為便毛為便無左 悔し可聞如是白ませば青丹吉国内（くぬち）盡（ことごと）見せまし物乎 妹が見し 阿布知の花は 散りぬべし 吾泣く涙 未だ干なくに 大野山 霧立ち渡る 吾嘆く 沖曾の風尔 霧立ち渡る

神龜五年（七二八年）七月廿一日 筑前國守山上憶良上

「慕ふ」後を追う（鳴く子なす慕ひきまして四六〇）」と、後を追うように大宰府にやって来た妻が死んだ。「伊企陁」いきち「氣力」を出して新しい仕事に励んだのに、妻が死んだ。石木のように「問ひ放く」言葉をかける」ことすらできない。このようになると知っていたなら、青丹吉の奈良を見せるため帰るのだった。初夏に薄紫の小さな花

が咲く阿布知「梅檀」が散っている。「沖曾」ため息」しか出ない。

憶良は旅人になり替わって歌を詠んでいる。お互いの存在（社会的立場と文学的力量）を存分に知り尽くした者同士だからこそ、こんなことも許しあえるのだろう。

なお旅人の妻の死を詠むのは憶良だけではない。

式部大輔石上堅魚朝臣歌一首（一四七二）

霍公鳥来鳴き響（とよ）もす卯の花能 共にや来之と問はまし物乎

右神龜五年戊辰大宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇病長逝焉 于時 勅使式部大輔

石上朝臣堅魚遣大宰府弔喪並賜物也 其の事既畢驛使及府諸卿大夫等共登記夷

城而望遊之日乃作此歌

大宰帥大伴卿和歌一首（一四七三）

橘之 花散る里乃 霍公鳥 片戀為乍 鳴く日四曾多寸

石上堅魚などと変名を使っているが、霍公鳥のように一緒に歌っていると信じていたのにと詠んでいる。それに対して大伴旅人が「一人で鳴いています」と答える。なお注釈に「夷城而望遊」とあり、大宰府は神龜五年（七二八年）になっても「蝦夷」の城跡である（注3）。

大伴坂上郎女思筑紫大城山歌（巻八・一四七四）

今もかも大城乃山尔 霍公鳥 鳴き響（とよ）むらむ 吾無けれども 灼然（いちしろく） 時雨の雨は 零らなくに 大城の山は 色付きにけり

謂大城山者在筑前國御笠郡之大野山頂号曰大城者也（二九七）

石上堅魚に旅人が和したあと、旅人の義妹坂上郎女が追和する。妻大伴郎女が死んだあと、佐保から義妹坂上郎女が大宰府に来たのである。大城山が死者を弔う歌に登場するのは、大城「大荒城墓」だからだ。詠んでいる場所は太宰府で、大城山「大野山」、筑前國御笠郡と紹介されるから、誰もが太宰府天満宮と思ってしまう。だが、日本書紀と万葉集の大宰府には「太」に点がない。これは大きな問題である。歌詞両首大宰帥大伴卿歌二首答歌二首（巻五・八〇六〜九）多都能馬母 今も愛てしか 青丹吉 奈良乃都尔 往きて来むた米

現(うつ)仁波合ふ吉も無し 烏玉能 夜の夢にを 次て見えこそ  
多都乃麻乎 吾波求めむ 青丹吉 奈良乃都迄 来む人のた米  
直尔相はず 荒くも鬱(おほ)く 敷妙乃枕去らず堤 夢尔之見えむ

大伴淡等(旅人)謹状

神亀五年七月の山上憶良の「哀世間難住歌」(八〇四〜五)の直後に  
大伴旅人の歌が掲載されるが、歌の内容からすると最初の二首が山上  
憶良の歌で、答歌が旅人の歌。旅人は奈良に行きたいと願う憶良のた  
め、龍馬(多都能馬)を求めましようかと答えている。

神亀五年は大伴旅人が大宰府に赴任した年。その年に山上憶良が旅  
人の妻の死を歌にし、奈良の旅人宅に伺いたいと歌を詠む。初対面な  
ら考えられないこと。しかも旅人はそのことを一向に気にせず、フラ  
ンクに付き合っている。よって山上憶良と大伴旅人は大宰府以前から  
の知り合いと見られる。

【注3】夷城而望遊Ⅱ大宰府を蝦夷城とするので「山澤亡命」記事を紹介する。  
意気は青雲の上に揚ると雖も、身体は猶し塵俗の中に在り。修行得道の聖に驗  
あら未。蓋しこれ山沢に亡命する民なり(神亀五年Ⅱ七二八年)(万葉集八〇〇)。  
『続日本紀』「山沢に亡命して挟蔵し、百日まで首せざれば、罪に服すること初  
の如くす」(七〇七〜七二七年)。

## 令和の梅花宴

次は中西進氏が有名にした「令和の梅花宴」。梅花宴序文の「初春  
令月気淑風和」から元号「令和」が作られた。その場所を太宰府と紹  
介されるが、万葉集の大宰府は太宰府ではない。万葉集の筑紫(つく  
し)も筑紫(ちくし)ではない。それを前提に詠んでほしい。

梅花歌卅二首並びに序(巻五・八一五〜八四六)

天平二年(七三〇年)正月十三日 萃(集)于帥老之宅 申(開)宴會也 于時初

春令月 氣淑風和 梅披(ひらく)鏡前之粉 蘭薰珮後之香 加以 曙嶺移雲  
松掛羅而傾蓋 夕岫(くき)結霧 鳥封穀而迷林 庭舞新蝶 空帰故鴈 於是盖  
天坐地 促(ち)かつく膝飛觴(さ)かづき 忘言一室之裏 開衿煙霞之外 淡然  
自放 快然自足 若非翰苑(文人仲間)何以攄(のべる)情 詩(請)紀(おさむ)落梅  
之篇古今夫何異矣 宜賦園梅聊(い)ささか成短詠  
大貳紀卿(八一五)

睦月立ち春の来たらば かくしこそ 梅ををきつつ 楽しきをへめ  
少貳小野大夫(巻五・八一六)

梅の花 今咲けるごと 散り過ぎず 吾宅の苑に あり越せぬかも  
少貳栗田大夫(八一七)

梅の花咲きたる園の青柳は 鬢(かづら)にすべく 成り尔けらずや  
筑前守山上大夫歌(巻五・八一八)

春去れば先(まず)咲く屋戸の 梅の花 一人見乍や 春日暮らさむ  
豊後守大伴大夫歌(巻五・八一九)

世間は 恋繁しゑ夜 かくし有らば 梅の花にも ならまし物を  
筑後守葛井大夫(巻五・八二〇)

梅の花 今盛りなり 念ふ度知 挿頭ににしてな 今盛りなり  
笠沙弥(八二二)

青柳 梅等之花乎 折挿頭 能見手能後者 散奴友吉  
主人(八二三)

我が園に 梅の花散る 久方の 天より雪の 流れくるかも  
大監伴氏百代(八二三)

梅の花 散らくは伊豆く しかすがに この紀の山に 雪は零り乍  
小監阿氏奥嶋(八二四)

梅の花 散らまく惜しみ 我が園の 竹の林に うぐひす鳴くも  
小監土氏百村(八二五)

梅の花 咲きたる園の 青柳を 鬢にしつつ 遊び暮らさな  
大典史氏大原(八二六)

うちなびく 春の柳と 我が宿の 梅の花とをいかにかわかむ  
小典山氏若麻呂(八二七)

春去れば木梢(こぬれ)隠りて 鶯ぞ 鳴きて去ぬなる 梅が下枝に  
大判事丹氏麻呂(八二八)

人毎に 折り飾しつつ 遊べども 弥珍しき 梅の花かも  
薬師張氏福子(八二九)

梅の花 咲きて散りなば 桜花 次て咲くべく なりにてあらずや  
筑前介佐氏子首歌(巻五・八三〇)

万世に年は来経(きふ)とも 梅の花絶ゆることなく 咲き度るべし  
壱岐守板氏安麻呂(八三一)

春なれば 宇倍も咲きたる 梅の花 君を思ふと 宵も寝なくに  
神司荒氏稲布(八三二)

梅の花 折りて飾せる 諸人は 今日の間は 楽しくあるべし  
大令史野氏宿奈麻呂(八三三)

年の端に 春の来たらば かくしこそ 梅を飾して 楽しく飲まめ  
小令史田氏肥人(八三四)

梅の花 今盛りなり 百鳥の 聲のこほしき 春来たるらし  
薬師高氏義通(八三五)

春去らば 逢はむと念し 梅の花 今日遊びに 相見つるかも  
陰陽師礖氏法麻呂(八三六)

梅の花手折飾して 遊べども 厭きたらぬ日は 今日にしありけり  
竿師志氏大道(八三七)

春の野に鳴くや鶯 懷(なつ)けむと 我が家(へ)の園に 梅が花咲く  
大隅目榎氏鉢麻呂(八三八)

梅の花 散り紛(まが)ひたる 岡傍(ひ)には 鶯鳴くも 遥か魂消て  
筑前目田氏真上(八三九)

春の野に 霧立ち渡り 降る雪と 人の見るまで 梅の花散る  
壱岐目村氏彼方(八四〇)

春柳 蘊(かづら)に折りし 梅の花 誰か浮かべし 盃の上に  
對馬目高氏老(八四一)

鶯の 聲(を)と聞く苗に 梅の花 我が家の園に 咲きて散る見ゆ  
薩摩目高氏海人(八四二)

我が宿の梅の支末(しづえ)に遊びつつ 鶯鳴くも散らまく惜しも  
土師氏御道(巻五・八四三)

梅の花 折挿頭乍 諸人の 遊ぶを見れば 都しぞ念ふ  
小野氏国堅(八四四)

妹が家に 雪かも零ると 見るまでに ここだも惑ふ 梅の花かも  
筑前拯門氏石足(八四五)

鶯の 待ちかてにせし 梅が花 散らずありこそ 思ふ娘がため  
小野氏淡里(八四六)

霞立つ 長き春日を 挿頭(かざ)せれど 弥懐かしき 梅の花かも

梅花宴でも旅人と憶良が和している。この宴に「咲く花の匂ふが如く今盛りなり」と奈良を謳歌した小野老が第二首目に登場する。山上憶良は四番目で「まず咲く宿の梅の花 一人見つつや春日暮らさむ」と歌い、ほかの参加者とは違い、妻を失い一人暮らしする旅人をいたわっている。旅人はそれに応え、「我が苑に梅の花散る久方の天より雪の流れ来るかも」と詠んでいる。「あの世に逝った妻が天から散らしてくる雪のように見える梅の花びらだ」と答えている。三十二首も並ぶが、旅人と憶良の強いつながりを強調する梅花宴である。

なお大貳・少貳は大宰府に派遣された役人に与えられる位で、少貳を後に苗字とした武家もいる。

大宰帥大伴卿冬日見雪憶京歌(二六三九)  
沫雪の 保杼呂保杼呂尔 零り敷け者 平城の京師 念ほゆる可聞

大宰帥大伴卿梅花歌(二六四〇)  
吾が岳尔 盛りに開有る 梅の花 遺有る雪乎 乱(まが)へ鶴鳴

卷八に大宰帥大伴卿が奈良佐保地を思つて梅と雪を詠む歌がある。

## 大宰府で憶良と楽しむ旅人

次は卷八に飛んで、大宰府の旅人宅で詠まれた歌を紹介する。

多夫手二毛 投げ越都倍吉 天漢 へだてれば可母 数多為便無き  
(二五二二) 右天平元年七月七日夜憶良仰觀天河 一云帥家作

最初に山上憶良の七夕歌が登場する。たぶてはつぶて(小石)。天漢と書いて「天の川」と読むのは、七夕伝説が中国の揚子江支流漢江流域で作られたからだ。天平元年とあるから、梅花宴の半年前のこと。天平二年七月八日夜帥家集會(一五二三〜六)

秋風之吹尔之日從 何時(いつし)可登 吾待ち戀之 君曾來座せ流  
天漢 伊刀河浪者立たねども 伺候(さもら)ひ難し 近きこの瀬平  
袖振ら者 見も可波しつべく近け雖も 度る為便無し秋西あらねば  
玉蜻蜒ほのかに見而別去(な)者毛等奈(もとな)也戀牟 相ふ時まで

これも山上憶良作であろう。大宰帥宅とわざわざ記されるから、憶良は旅人を彦星にたとえて詠んでいる。秋風に誘われてやってきた君別れてしまったら逢う日を思い焦がれることだろうと、やがて奈良佐保宅に帰る旅人への思いを歌にしている。

憶良誠惶(おそれる)頓首謹啓(卷五・八六八〜八七〇)

憶良聞 方岳諸侯 都督刺史 並依典法 巡行部下 察其風俗 意内多端 口外難出 謹以三首之鄙歌 欲寫五藏之鬱結其歌曰

憶良が方岳(周)の諸侯に聞くに、都督刺史は並(皆)典法(きまり)に依つて部下(地方)を巡行し其風俗を察す。意(おも)いは内に(秘)めることが多く、端(ただ)すことを口外する(口に出す)ことは難く、謹んで三首之鄙歌を出し、以て(彼らの)五藏(腹の中)之鬱結(不満)を寫さんと欲す、其歌

松浦潟 佐夜媛の児が領布(ひれ)振りし 山の名の宮聞き乍居らむ

帶し媛 神の命の 名告らすと 御立たしせりし 石を誰見き  
百かしも行かぬ松浦道今日往きて 明日は来なむをなにかさやれる

天平二年七月十一日 筑前國司山上憶良謹上

天平二年七月八日大宰帥の家の集会で歌を詠んだ山上憶良が、七月十日・十一日の両日松浦河より大伴旅人に手紙を送る。しかし太宰府天満宮から松浦(佐賀県唐津市松浦潟)まで徒歩二日で移動することは困難。しかも憶良の手紙の直前にある『遊於松浦河』(八五三〜八六三)を大伴旅人の作とする人(古沢未知男氏)もいる。それゆえ、大宰府で旅人と憶良が『遊於松浦河』を作つて楽しんでいると考えるほかない。なお、都督刺史は中国の官職で、都督は軍事、刺史は治民である。

大宰諸卿大夫並官人等宴筑前國蘆城駅家歌二首(一五三〇〜三一)

娘部思をみなへし 秋芽子交る蘆城の野今日を始め而 萬代尔見む  
珠匣(くしげ) 葦木乃河乎 今日見て者 萬代迄に 忘らえめ八方

右二首作者未詳

笠朝臣金村伊香(兒)山作歌二首(一五三二〜三三)

草枕 客行く人毛 往き觸ら者 匂ひぬべく毛 開流芽子香聞

伊香(兒)山野邊尔開有る 芽子見れ者 公之家有る 尾花之念ほゆ

石川朝臣老夫歌一首(一五三四)

娘部志 秋芽子折れ礼 玉梓乃 道去き畏跡 乞はむ兒の為

藤原宇合卿歌一首(一五三五)

吾背子乎 何時曾且今(いま)か登 待つ苗尔 於毛也者將見 秋の

風吹く

縁達帥歌一首(一五三六)

暮相而 朝面羞 隱野乃 芽子者散去寸 黄葉早續(つ)げ

山上臣憶良詠秋野花歌二首(一五三七〜八)

秋野尔 咲き有る花乎 指(およ)び折り 可伎數ふれ者 七種の花

芽之花 乎花葛花 瞿麦之花 姫部志 又藤袴 朝顔之花

天皇御製歌(卷八・一五三九〜四〇)

秋の田乃穂田平雁之鳴聞(くらくけ)尔夜の穂杼呂尔毛鳴き渡る可聞  
今朝の旦開雁鳴寒く聞き之奈倍 野辺の浅茅曾 色付き丹来(ける)

大宰帥大伴卿歌二首(一五四一〜二)

吾丘尔 棹壯鹿来鳴く 先(はつ)芽之 花嬢問尔 来鳴く棹壯鹿

吾丘之秋芽の花 風乎痛(や)み落る可く成りぬ 見む人裳欲得(がも)

三原王歌一首(一五四三)

秋露者 移し尔有りけり 水鳥乃 青羽乃山能 色付く見れ者

湯原王七夕歌(卷八・一五四四〜五)

牽牛之 念ひ座すらむ 情ゆも 見る吾辛苦し 夜之更降去けば

織女之 袖續ぐ三更(よひ)之 五更(暁)は 河瀬之鶴は 鳴かず友吉

市原王七夕歌一首(一五四六)

妹許(がり)登 吾去く道乃河有れ者 附目(つくめ)緘結(むす)ぶ跡

夜ぞ更降にける

藤原朝臣八束歌一首(一五四七)

棹四香能 芽(はぎ)二貫(ぬき)置有る 露之白珠 相佐和仁 誰人の

可毛 手尔卷かむ知布(ふ)

大伴坂上郎女晚芽子歌一首(一五四八)

をそろゝ嘘ゝ輕率

咲く花毛 乎曾呂(をそろ)波厭ふ 奥手有る長き意尔 尚不如家里

作者不詳(想像するに山上憶良の歌に始まり、坂上郎女で終わる大宰府蘆城駅での歌会である。参加者は天皇や藤原家を含むそうそうたる面々。七夕の季節は過ぎ、女郎花や萩の花・紅葉が歌われる。天皇の歌の前後を飾るのが山上憶良と大伴旅人。この二人が天平初期を代表する歌人であることがこれで証明されたようなもの。なぜか近江地名の伊香(児)山が歌われているのが謎である(注4)。

なお小倉百人一首に天智天皇の歌として「秋の田のかりほの庵の苦をあらみわが衣手は露に濡れつつ」がある。今回の一連作の中の天皇の歌も似たような内容になっている。ところで藤原宇合は不比等の三

男。待つは松の掛詞で「於毛也」は母屋、見越しの松となる。藤原八束は宇合の兄房前の三男。藤原四家から二人参加していることになる。射目立てて 跡見乃岳辺之 瞿麦の花 総手折 吾は持ち去く 寧楽人之為(一五四九)

神武東征に出てくる地名「跡見」が大宰府の宴の直後に歌われるが、一五四九歌も大宰府蘆城駅の宴会で詠まれた歌と思われる。奈良人とは大伴旅人のことで、彼のため「跡見乃岳辺之瞿麦の花」を摘んでいくと詠んでいる。山上憶良作と思われる。

高圓之秋野の上乃瞿麦之花うら若見人之挿頭師瞿麦之花(一六一〇)  
大伴旅人が、それに答えて瞿麦之花歌を返している。

大宰少貳石川朝臣足人歌一首(卷六・九五五)

刺す竹之 大宮人乃 家跡住む 佐保の山乎者 思ふや毛君

帥大伴卿和歌(卷六・九五六)

八隈知之吾大王乃御食(をす)國者 日本毛此間(ここ)毛同じとぞ思ふ

卷六にも大宰府の大伴旅人が登場する。これらは神龜五年と天平二年の間にはさまれた歌。石川足人が「佐保が恋しいでしょう」と呼びかけると、旅人は「天皇の支配する地ならどこも同じ」と煙に巻く。

冬十一月大宰官人等奉拝香椎廟訖退歸之時馬駐于香椎浦各述懷作歌

帥大伴卿歌一首(卷六・九五七)

去来児等 香椎乃潟に 白妙の 袖さへ濡れて 朝菜摘み手む

大式小野老朝臣歌(卷六・九五八)

時風 吹くべく成りぬ 香椎潟 潮干の沔(うら)に 玉藻荇りてな

豊前守宇努首男人歌(九五九)

往き還り 常に我が見し 香椎潟 明日ゆ後には 見む縁も無し

帥大伴卿遥思芳野離宮作歌(九六〇)

隼人乃 瀬戸乃磐母 年魚走る 芳野之瀧尔 尚不及家里

帥大伴卿宿次田温泉聞鶴喧作歌(九六一)

湯原尔 鳴く蘆多頭者 吾如く 妹尔恋ふれか 時わかず鳴く

次は天平二年十一月、香椎廟への参拝の帰路の歌。香椎廟(檀日宮)は仲哀天皇が死んだ場所だが、現在の香椎宮(福岡市東区)ではない。檀日宮は日本書紀神功紀に「尾田の吾田節の淡郡」と紹介され、『倭姫命世記』では「淡海甲可日雲宮」と記される(注5)。したがって近江地名である。

#### 【注4】伊香(児)山(近江地名)

王の命(みこと)恐み 雖見不飽 檜山越而 真木を積む 泉の河乃 速き瀬を 竿刺し渡し 千速振 氏の渡乃 多企都瀬乎 見乍渡而 近江道乃 相坂山丹 手向して 吾越え往けば 楽浪の 志我能韓埼 幸有者 又反見 道前 八十阿(くま)毎に 嘆き乍 吾過ぎ往けば 弥遠丹 里離り来奴 弥高二 山文越 来奴 剣刀 鞘ゆ抜き出而 伊香胡山 如何に吾せむ 往邊不知而(三二四〇) 天地を 嘆き乞ひのみ 幸有らば 又反り見む 思我の韓崎(三二四一)

右二首、但此短歌者 或書云穗積朝臣老配於佐渡之時作歌也

【注5】仲哀天皇八年筑紫幸、穴門豊浦宮に座す。難県に至り檀日宮に居す。是贅穴(そしし)の空国なり。仲哀九年二月天皇筑紫の檀日宮に崩り給ひき。皇后斎の宮に入り、親ら神主と為り給ひ：『神風の伊勢の国の百伝ふ度逢縣の拆さく 鈴五十鈴の宮に坐せる神、名は撞(つき)賢木嚴(いづ)の御魂、天疎る向津姫の命』と宣りき。亦：『此の神を除きて神坐すや』と問ひ：『幡荻穂に出る吾は、尾田の吾が田節の淡の郡に坐せる神坐せり』。「垂仁天皇代に淡海甲可日雲宮四年 斎奉・尾張国中島宮座・滝原之国：宮造令坐」(倭姫命世記)

### 奈良京佐保へ帰る

天平二年十一月旅人に大納言就任・奈良京帰郷の辞令が発せられる。  
丹生女王贈大宰帥大伴卿歌二首(卷四・五五三〜四)

天雲乃遠(そき)隔乃極み遠けど裳 情(こころ)志行け者 戀流物可聞  
古人乃食(たま)へ令め有る吉備能酒 病め者為便無し 貫實賜らむ

大宰帥大伴卿贈大貳丹比縣守卿遷任民部卿歌(卷四・五五五)

君が為 釀し待酒 安の野尔 獨り哉飲まむ 友無し二思手

この一連作は筑前蘆城駅での餞別歌の直前に詠まれる。なぜか、「吉備・安」地名が蘆城駅とかかわっている。吉備も安も淡海(近江)に関連する地名である(注6・注9)。

なお貫實(ぬきす)はすのこのこと。酒が暑氣に当たたらぬよう、すのこで覆っている。六十度殺菌をまだ知らないためであろうか。

天平二年(七三〇)冬十一月大伴坂上郎女発帥家上道超筑前国宗形郡名児山之時作歌(卷六・九六三)

大汝 小彦名能 神社(こころ)者(は) 名著け始めけめ 名耳(ばかり) 乎 名児山と負(ふ)而 吾戀之 千重之一重裳 奈久佐めな國  
同坂上郎女向京海路見演貝作歌(九六四)

吾背子尔 戀ふれ者苦し 暇有者 拾ひ而将去 戀忘れ貝

大伴旅人の前に、義妹坂上郎女が帰郷する。坂上郎女の愛する夫は藤原四兄弟の末子藤原麻呂である。名児山は宗像大社の裏山だが、なぜ宗像大社の裏山がここで登場するか、後の機会にじっくり検討する。いづれにしろここで坂上郎女は宗像大社の神を「大汝小彦名能神」と歌っていることになる。

大宰帥大伴卿被任大納言臨入京之時府官人等餞卿筑前国蘆城駅家歌四首(卷四・五六八〜七二)

三埼廻之荒磯に縁する 五百重浪 立ちて毛居て毛 我念へ流吉美

右一首筑前掾門部連石足

辛人之 衣染むと云ふ 紫之 情尔染み而 念ほゆる鴨

山跡邊に 君之立つ日乃 近付け者 野に立つ鹿毛 動め而曾鳴く

右二首大典麻田連陽春

月夜吉し 河音清之 率(いざ)此間(ここに) 行く毛去かぬ毛 遊びて歸かむ 右一首防人佑大伴四綱

大伴旅人の奈良帰任に向け、蘆城駅で餞別の宴が催される。そこで

三崎・辛人と「志賀の辛崎」を連想させる言葉が詠まれる(注7)。しかも「山跡邊に君之立つ日乃近づけば」と、山跡が海辺と歌われる(注8)。冬十二月大宰帥大伴卿上京時娘子作歌(九六五〜九六六)

凡有らば 左毛右毛(かもかも)為むを 恐(かしこ)みと 振りたき袖を 忍びて有るかも

倭道は 雲隠りたり然れども 余が振る袖をなめし(無礼)と念ふな  
右大宰帥大伴卿兼任大納言向京上道、此日馬駐水城願望府家 于時送卿府吏之中有遊行女婦 其字曰兒嶋也 於是娘子傷此易別嘆彼難會 拭涕自吟振袖之歌  
大納言大伴卿和歌二首(卷六・九六七〜八)

日本道乃吉備乃兒島乎 過ぎ而行か者 筑紫乃子嶋 念ほえむ香聞  
大夫(ますらを)跡 念へる吾哉 水茎之 水城之上尔 泣拭はむ

義妹よりひと月遅れて旅人が帰郷の途に就く。旅人は吉備の兒嶋(注9)から筑紫の小嶋を経由する。なお「拭ふ」に「のごふ」と仮名が振られ、万葉学者は「九州弁」と紹介する(注10)。

庚午冬十二月大宰帥大伴卿向京上道之時作歌(四四六〜四五〇)

吾妹子之見師輒浦之天木香(むろ)の樹者常世に有れ跡見し人ぞ奈吉  
輒浦之 礪之室の木 見む毎に 相見之妹者 忘らえめ八方

礪の上(へ)丹根蔓(ば)ふ室の木見之人乎何在(いづら)登問は者語り告  
げむ可 右三首過輒浦日作歌

妹与来之 敏馬能埼乎 還る左尔 獨り之見れ者 涕具末(ま)之毛  
去く左尔波 二人吾見之 此の埼乎 獨り過ぐれ者 情悲し喪

右二首過敏馬埼日作歌

次は輒の浦や敏馬埼を通り過ぎる。

還入故郷家即作歌(四五一〜三)

人毛奈吉 空しき家者 草枕 旅尔益り而 辛苦し有り家里  
妹与為而 二人作り之 吾山齋(しま)者 木高く繁く 成に家留鴨  
吾妹子之植多之梅の樹 見る毎に 情咽(む)せ都追(つつ) 涕之流る

奈良佐保の地に帰った大伴旅人は、大宰府で死んだ妻を思い起こし、独り身のさみしさを歌にしている。妻と二人で作った庭園(山齋)が留守の間草ぼうぼうになったと嘆いている。

そんな旅人に山上憶良が会いたい思いを伝えてよこす。

敢布私懷歌三首(卷五・八八〇〜二)

天離る 夷に何時歳 住まひつつ 都の手振り 忘らえにけり  
かくのみや 息付きをらむ 荒玉の 消え往く年の 限り知らずて  
吾が主の 御靈賜ひて はるさらば 奈良の都に めさげ賜はね

天平二年十二月六日筑前國司山上憶良謹上

私も天皇の辞令を頂戴して奈良の都に行きたいと願っている。  
三年大納言大伴卿在寧樂家思故郷歌二首(卷六・九六九〜九七〇)

しましくも去きて見て壯鹿 神名火乃淵は浅にて 瀬にか成るらむ  
指進乃栗栖乃小野之芽(はぎ)の花 落ちむ時には 行きて手向けむ

翌年旅人は奈良で大宰府を思い起こして歌を詠む。その歌には「壯鹿」志賀「栗栖(くるす)」と近江地名が登場する(注11)。しかも神名火乃淵が浅くなつて「瀬」になっていると詠む。

天平三年辛未秋七月大納言大伴卿薨之時歌(卷三・四五四〜八)

愛き八師 榮之君乃 伊座し勢婆 昨日毛今日毛 吾乎召さ麻之乎  
如是耳に 有り家類物乎 芽子の花 咲き而有り哉跡問ひ之君波母

君尔戀 痛毛為便奈美 蘆鶴之 哭耳し泣かゆ 朝夕に四天  
遠長く 仕へむ物常 念有り之 君師座(ま)さね者 心神(ど)毛奈思  
若子乃 這ひ徘徊り 朝夕に 哭耳ぞ吾泣く 君無しに四天

右五首資人余明軍不勝犬馬之慕心中感緒作歌

見れ杼飽かず伊座し之君我黄葉乃移り伊去け者 悲しく喪有香(九)  
右一首勅内礼正縣犬養宿祢人上使檢護卿病而醫藥無驗逝水不留因斯悲慟即作歌  
故郷佐保地に帰ってわずか半年ほどで、旅人は死ぬ。大宰府で和歌仲間と榮華を極めた旅人だったが、妻の居ない佐保では生きる気力も失われたようだ。「萩の花が咲いたかと、そればかり繰り返す」と、

付人余明軍が旅人の死に際を歌っている。佐保に帰ってますます意氣軒昂たる坂上郎女とはまったく異なる。老いて妻を失った男の悲しさと言つてしまえば、それまでか。長男家持はこの時満十二歳。だから若子(みどりご)は家持の弟書持(ふみもち・四六三歌)と思われる。

大伴旅人が奈良に帰ってから歌がほかにもある。

大宰帥大伴卿上京之後笠満誓沙弥贈卿歌二首(五七二・五七三)

真十鏡 見飽かぬ君尔贈れて哉 旦(あさな)夕(ゆふな)尔左備乍将居野干玉之 黒髪變 白髪(け)手裳 痛き戀庭 相時有来

大納言大伴卿和歌二首(巻四・五七四・五)

此間(ここに)在而筑紫也何處 白雲乃 棚引く山之 方西有る良思

草香江之入江二求食(あさ)る蘆鶴乃痛(あな)多豆多豆し友無し二指天

まず笠満誓と歌のやり取りをしている。笠満誓は大宰府に居り、「筑

紫Ⅱ大宰府は山の向こう側」と旅人が詠んでいる。しかし草香江の歌は意味不明。摂津大夫高安王に贈った歌か。

大宰帥大伴卿上京之後筑後守葛井大成連悲嘆作歌一首(巻四・五七六)

今より者 城山道者 不樂(さぶ)しけ牟 吾通はむ常 念ひ之物乎

大納言大伴卿新袍贈摂津大夫高安王歌(巻四・五七七)

吾衣人に莫著せ曾 網(あ)引き為る 難波壮士乃 手には触る雖も

大伴宿祢三依悲別歌(五七八)

天地与 共に久しく 住ま波牟等 念ひ而有り師 家之庭羽裳

ほかに二人から歌を贈られる。その歌の間に旅人が高安王(大原真人)に贈った歌がある。やはり五七五歌は難波に住む高安王相手と思われる。

余明軍与大伴宿祢家持歌(五七九・八〇) 明軍者大納言卿之資人也

見奉り而 未だ時太尔 更らね者 年月の如 念ほゆる君

足引乃山尔生ひ有る 菅根乃 懃(ねもころ)見巻く 欲しき君可聞

旅人の死を悼む歌を詠んだ余明軍が、子の家持に歌を与えている。

佐保地の大伴家から離れた寂しさを詠んでいると思われる。

以上、大伴旅人の歌を見てきたが、彼の歌は巻三から巻八まで(巻七にはない)しかなく、しかも柿本人麻呂や山部赤人とは全くつながりがない。だから、柿本人麻呂とは異なる世界に生きた人物と考えられる。しかも宮廷歌人という人麻呂の枠を超え、現代につながる個(私)の存在を主張する文学を日本で作りだした人と、私は思う。主張の仕方が異なるが、個(私)の存在を唱えるのは山上憶良も同じで、それゆえ二人は無二の友となったのであろう。

古今集は序文(仮名序)で「山柿」と柿本人麻呂・山部赤人をたたえるが、私は個(私)を主張する大伴旅人と山上憶良が好きだ。人間臭い二人の歌が、現代の私たちの心を救ってくれる。

【注6】 吾妹児に 又も相海の 安の河 安寝も宿ずに 恋渡る鴨(三一五七)

【注7】 筑前国蘆城駅の三埼・辛人は近江志賀や鐘崎に重なる。

楽浪之 思賀乃辛碕 幸く有れど 大宮人の 船待ちかねつ(三〇〇)

楽浪之 志我の大和田 澱むとも 昔の人に 亦も相めやも(三二)

千磐破る 金之三埼を 過ぎぬ軛 吾は忘れじ 壮鹿の須壳神(二二三〇)

【注8】 山跡邊Ⅱ海辺の大和

天皇登香具山望国之時御製歌(巻一・二)

山常には村山有れど 取りよろふ天の香具山 騰り立ち国見をすれば 国原は

煙立つ龍 海原は陽立つ多都 うまし国ぞ 蜻嶋 八間跡の国は

長皇子御歌(巻一・七三)

吾妹子を 早見浜風 倭なる 吾を松椿 吹かざるなゆめ

【注9】 日本書紀素戔鳴尊大蛇退治「是の時素戔鳴尊、安芸国の可愛の川上に下降りましき。大蛇の尾を斬りたまふ時：劍ありき。草薙の劍と為号く。今尾張国吾湯市村に在り。熱田の祝部が掌る神なり。今石上と曰ふ(第二の一書)。大蛇斬りたまへる劍は、今吉備の神部の許に在り(第三の一書)。

【注10】拭ふⅡのごふ(九州弁)

為防人情陳思作歌(卷二十・四三九八)

大王の命恐こみ 妻別れ悲しくは

有れど 大夫の情(こころ)振り起こし ……真幸くて早還り来と 真袖持ち涙を

拭(ぬぐ)ひ むせびつつ言問ひすれば 郡鳥の出で立ちかてに ……春霞嶋廻

に立ちて 多頭が鳴の悲しく鳴けば はろばろに家を思ひて おひそや(負ひ

征矢)の そよと鳴るまで 嘆きつるかも

日本書紀敏達元年六月条「六月賊有り、高麗の大使の頭を打ちて退りぬ。大使、

默然(もだ)して地に立ち、面の血を拭(ぬぐ)ふ。」

【注11】栗栖(栗林)・栗太は日本書紀では近江地名

「菟道↓逢坂↓狭狭浪の栗林↓瀬田」(忍熊王)、難波↓河内国埴生坂↓大坂↓飛

鳥山↓山口↓當摩徑↓龍田山↓攪食(かきはみ)の栗林(くるす)↓石上・振神宮

(履中前紀)、雄略十一年近江国栗太郡言さく「白き鶺鴒、谷上(田上)の濱に居り」、

淡海国言し「坂田郡の人小竹田史身…栗太郡磐城村…」(天智三年)、息長の横河

↓鳥籠の山↓安河の濱↓栗太↓瀬田↓栗津の岡↓三尾の城↓栗津↓大友皇子山

前で自頸(壬申の乱)

最後に、大伴旅人の長男大伴家持の人生の最期を紹介する。

万葉集の編者と目される大伴家持は人生の最後に蝦夷討伐名目で

東北地方に左遷させられる。延暦元年(782年)6月17日のこと。延

暦四年(785年)4月7日「名取より以南十四郡は、山海に僻在して、

塞を去ることはるかに遠し。徴発することあるに属しては、危急に会

わず。是に由りてかりに百姓を募り人兵を国府に足(た)し、防御を東

西に設く。誠に是れあらかじめ不虞に備えて万里に推鋒せむものなり。

但し以(おも)んみるに徒(いた)ずらに開設の名ありて未だ統領の人を

任ぜず。望み請うらくは、建てて真の郡と為し官員を備え置かんこと

を。然らば則ち民は統攝の帰するを知り、賊は窺(くわ)愈(き)ゆの望を絶た

む」と上申し、8月28日任地にて死去している。家持の上申書は阿

弓流為の反乱が起きる4年前。家持は蝦夷の勝利を予感していたよう

だ。